

キャラクター名
津川 篤美

プレイヤー名

シンドローム	ブラム=ストーカー エグザイル	ワークス	UGNチルドレンA	カヴァー	高校生
オプション		年齢	17	性別	男
覚醒	無知	衝動	吸血	初期侵食率	35 %
出自	資産家	経験	仲間の死	邂逅	敷島 あやめ

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	37
肉体	3	1	0		4	8	行動値	7
感覚	3	0	0			3	(非装備時)	7
精神	1	0	0			1	戦闘移動	12
社会	1	0	0			1	全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	2		射撃			RC	1		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達		
運転:			芸術:			知識:			情報: UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
赫き剣	白兵	8r+2	0	HP+8		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイム	消費
[05] 実験体/ロストナンバー	P	N		
鶴嶋 琉瑠華	P 純愛	N 嫌気		
山田 友樹	P 友情	N 不信任		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 2 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
赤色の従者	1	5	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果:	「従者」召喚							
不死者の人形	1	1	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果:	モデルの姿形を従者で再現							
血の絆	1	3	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果:	シナリオ終了時まで							
知恵ある者	1	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果:	従者のアイテム使用を可能にする							
赫き剣	1	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果:	HPをLvまで消費して「赫き剣」を生成							
渴きの主	2	4	メジャー	至近	単体	対決	-	
効果:	装甲値無視、HPLv×4回復							
コンセントレイト:ブラムストーカー	2	2	メジャー	-	-	-	-	
効果:	C値-Lv							
崩れずの群れ	1	2	オート	至近	自身	自動	-	
効果:	カバーリング可能							
	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

従者の尻に敷かれている肥満体形オタクくん。表向きはアニメ漫画ゲームを愛好し、好きな話題となるとたて教室の中心であつても会話がヒートアップするタイプの雰囲気や性格が暗い(やさしい表現)男子高校生であるが、裏の顔はそれなりに優秀なUGNチルドレンである。一角のUGNチルドレンとして抱くべき真面目さや真摯さは持ち合わせている。要領は悪くなく努力を重ねることも苦としないため勉学も任務のスコアは優秀で、あの体形ながら意外にも運動が得意である。こうしていい点ばかりを取り上げると好青年のように思える彼だが、吃音気味で汗っかき、おまけに(上記した自分が好きな話題以外では)引っ込み思案でその場を愛想笑いでやり過ごす癖がある。そしてお世辞にも整っていると言えない顔立ちとファッション方面に関してはママが買ってきた洋服を言われるがままに着まわしている現状も相まって、彼の内面を知らない他人からはいい印象を持たれにくい。世間の風当たりは強いが、彼が没頭するサブカルコンテンツやそれを語り合える友人たちの存在、戦友と呼び合えるUGNというコミュニティ、そしてなによりも彼の幼馴染である鶴嶋琉瑠華の面影に支えられて、今日も彼は世界に立っている。

海外にいくつか別荘を持つ程度には裕福な家に生まれるが、生まれついて不治の病を患っていることが判明する。症状に前例がない稀有な病であり、ここ数十年で給食的に発展した現代医学は、彼が10と年を数える前に死ぬこという残酷な未来だけを暗示した。しかし、そこに救いの手が差し伸べられる。それは、UGNと呼ばれる医業会社によって展開される先天性致死性の高い病気を治療するためのプロジェクト。通称"Numbers"。金に糸目をつけない両親は、その医業会社が大事な我が子に病を「処方」したとも知らず、まんまと彼を組織に売り渡してしまった。両親の元を離れ管理施設を訪れた初日、一人で建物を見て廻っていた彼はとある人物に出会う。無機質さを感じさせる白のコンクリートの壁に手をつき、口から漏れる咳を抑え込む。その指の隙間からは赤の血が染み出していた。しかしながら、そんな些細なことなど、どうでもよくなるほどに、彼女は美しかった。考える前に体が動き、彼はポケットからハンカチを差し出して。そして、そのハンカチを受け取った彼女の口から漏れた最初の言葉は――「ウッザいんですけど」。

これが、津川篤美と鶴嶋琉瑠華の最悪な最初の出会いであった。一方はお世辞にも見た目がいいとは言えないが努力家で心優しい肥満児。もう一方は勉強も運動もてんでダメな毒舌家ながら、超がつくほどの美少女。二人はありとあらゆる点が真逆な、穿った個性を持っており、本来であればずれ違い言葉を交わしあうこともなかったはずだ。しかしながら、どこの歯車がどう噛み合ったのか、UGNがこさえた檻の中でお互いが隣に居ることを許す親友のような関係性に二人はなっていた。何もかもが正反対。そんな特性の通り、琉瑠華はオーヴァードとして、実験体としての頭角をメキメキと現す一方で、彼は身体についた無駄なぜい肉を膨張させる程度のカシカ身につくことがなかった。そんな自分を琉瑠華に小馬鹿にされながらも、チルドレンの模範と評される彼女に憧れ、惹かれ、惚れて